



1. 町田市初のみつはしちかこ展は、56年の作家生活を一望できる構成で開催された 2. 貴重な生原稿や愛用の道具類 3. 『小さな恋のものがたり』最新刊と、最新の「ちい恋」が読める季刊『ちい恋通信』 4. 仕事も人生もゆっくりと楽しんでいるみつはしちかこ氏 5. 玉川学園町内を循環する「玉ちゃんバス」には「ハイあっこです」のキャラクターが描かれている 6. 文学館の展覧会には玉川学園のマップや(ほぼ)等身大のサリーも登場



みつはしちかこ 1941年、茨城県に生まれる。都立武蔵丘高校卒業後、アニメーション制作会社に勤務する傍ら、高校時代の漫画日記をもとに『小さな恋のものがたり』を描きため、1962年登場する姑は同居していた義母がモデル。クローの制服は息子たちも通った玉川中央幼稚園のもの。2015年手塚治虫文化賞特別賞、日本漫画家協会賞文部科学大臣賞を受賞。



「美しい十代」(学研)で漫画家デビューを果たす。1976年にはミリオンセラーとなり、翌年、日本漫画家協会賞優秀賞を受賞。1980年より朝日新聞日曜版で「ハイあっこです」を22年間連載。エッセイや詩画集など著書多数。『小さな恋のものがたり』を含め、総発行部数は累計4000万部

自由と解放という心地よさも体験した。しかし、その解放感を超えて、やはりもう一度描きたいという気持ちの沸き上がってきた。作家生活50年目の秋、相田みつをの詩とコラボする企画で再びペンを執り、それからはゆっくりと仕事に向き合う日々を送っている。

「もう描けないと諦めかけた時、読者からのメッセージに元気をもらったんです。チッチは季節と共に現れては元気に走り回る。そんな彼女を追いかけたいとアイデアが自然と浮かんでくるんです。」

2018年の晩秋。文学館で行われた展覧会は開館以来、最高の動員数を記録した。募集から僅か5分で定員に達したトークショーには、九州から駆け付けたファンもいた。

玉学から離れ、今は一人で人生をゆっくり楽しんでいる。サリーが留学して一人遊びが上手になったチッチのように、たくさんの思い出に囲まれて、今も彼女は輝いている。

漫画を描き始めたのは小学校低学年の頃。病気の母を喜ばせるためだった。母は彼女が3年生の時に他界する。悲しくて草むらに泣き伏せた時、目に留まったスミレやタンポポ、カタバミなどの可憐な花たちが心配してくれているような気がしたという。野に咲く小さな花のような女の子を描こう、それがチッチの原点だった。

漫画家を目指すようになった彼女は、21歳で学研にスケッチを持ち込んだ。それが見事採用され、月刊誌「美しい十代」で連載がスタートする。野の花から生まれたチッチ、そしてサリーは同じクラスの同級生がモデル。初恋の淡い気持ちのまま、揺れる想いを鮮やかに50年以上描き続けてきた。

玉川学園に引越してきたのは1972年、二男が生まれた時だった。春には満開の桜を、初夏には紫陽花を、クリスマスには大学の池のほとりの大きなツリーの煌めきを楽しみながら、エッセイや詩集も精力的に出版。1980年からは朝日新聞日曜版に「ハイあっこです」の連載も始まった。

しばらくして姑が亡くなり、2人の息子も独立すると生活環境の変化からか、彼女はうつ病を患ってしまう。入院し、デビュー46年